



経済教育ネットワーク

Network for Economic Education



大阪部会 (No.95)

日 時: 2025 年 10 月 12 日 (日) 15:05－16:55

場 所: 同志社大学大阪サテライト

参加者: 参加者 12名

【内容要旨】

今回は初めて参加される方が何人かおり、全員の自己紹介から始められた。

一つめの報告は、奥田修一郎氏(高野山大学)の「農産物の適正価格って何だろうか。一米価格の上昇から見えてきたもの」であった。2024、25年と続いている米の価格上昇を題材に、中学校公民の流通の箇所を想定した授業案である。本年夏の「先生のための経済教室(大阪)」のプログラムで報告されたが、その補足および追加報告と言える。

まず各社公民教科書の流通の記述にふれた後、生徒に「お米が食卓にあがるまでにどんな人間が関わるのか」をたずねた結果が紹介された。多くの生徒からの回答には「卸売」が抜けていることが目立ったという。奥田氏は、生徒に米の流通過程を説明した後、農家、卸売、小売、消費者と立場を分けたカードゲームを用いて、原価や途中のコストが反映された価格で生産者から消費者まで届くことが難しいことを体験させる。ただし、農水省が始めた政策に見られるように、生産、流通、消費者にいたる過程や、その間のコストなどを共通理解できるようになれば、米の適正な価格付けと生産、流通につながる期待も示された。

報告に対して、李洪俊氏(矢田南中学校)からは、生徒達がAMAZONなどネット通販から買うようになっているので卸売が浮かばない、フェアトレードなど生産者への共感を消費者に抱かせるのは難しいなどの指摘があった。また、佐古田英樹氏(さつき野学園)からは、小学校社会科の3年生、家庭科の5年生6年生で流通の話が出てくることが紹介された。その他篠原総一氏(経済教育ネットワーク代表)から、米の価格は政治的な側面が強いことが述べられた後、経済・流通の話とするなら、生産者米価・卸売玄米・小売精米の各段階の価格変化をみて、どの段階の価格上昇が大きいのかを比較するのがよいと、データとともに示された。

二つめの報告は、大塚雅之氏(三国ヶ丘高校)の「政治・経済」単元での累積債務問題を扱った単元開発であった。高校政治・経済の財政・租税の箇所に位置する4時間の授業実践である。まず、金融教育の動向と課題を整理し、金融取引が時間差のある特殊な取引であること、合理的行動に限界のある世界であることが確認される。授業では、具体的な数値例を使いながら財政の現状を把握させたり、社説など資料を比較させたり、海外の財政状況を参照したり、財政をめぐる理論を学習させたり、と多くの工夫が取り入れられている。中でも、4時間目に、生徒を将来世代と現在世代に振り分け、それぞれの立場から対話させている内容は興味深く、生徒達が将来と現在の対立関係と協調の必要性を理解していることが感じられる。

報告に対して、篠原氏からは大塚氏の報告資料でも参照されている西条辰義氏「フューチャー・デザイン」への言及があった。加えて、リカードの定理とMMTの発想が解説された。その後関本祐希氏(市岡高校)から、公共事業は将来にわたって受益があるから建設国債で将来負担でもよい、対照的に、社会保障を国債でまかなうと現在の高齢者の受益を将来世代の負担に押しつけるという解説があるが、その理解でよいかという質問があった。社会保障があるから現在の高齢者ケアをまぬがれているのだから、現役世代が国債の将来負担でもよいのではという質問も加えられたが、これらに関する議論は進まなかった。

(文責:野間敏克)

次回開催予定: 2026年1月11日(日)15:00～17:00、場所未定